

厚真の虎毛 トラクマ

第4部 トラクマは戦った

吉岡 政昭

8章 獣猟競技会と展覧会

今日、平蔵おじさんが訪ねて来た。

「実は来月の第1日曜日、隣町で獣猟競技会があるのですよ」

平蔵おじさんさんは言った。

「ジウリョウって、鉄砲で鹿とかウサギを撃つ銃猟競技ですか？」

お父さんは尋ねた。

「いえ、違います。ジウリョウは野獣の獣とカリ、つまり狩猟の猟と書くんですが、簡単に言えばアイヌ犬が熊にどのくらい勇敢に立ち向かうか、闘えるかを競う競技なんです。」

「そういうコンテストがあるのですか？ 獣猟競技会って言うのですか？知りませんでした。聞いたこともありませんでしたね。」

「トラクマを参加させてみたらどうかと思ひまして。なんと言ってもトラクマは幌姫の直腹なんですよ。きっと期待できると思うのですがね。それと犬のコンテストに関して少し説明しますね。」

「ええ、お願いします。」

「まず、コンテストには2つの種類があります。一つは今言いました獣猟競技会ともう一つ、展覧会というのもあります。」

「なるほど。」

「獣猟競技会というのは簡単に言えば、いま言いましたように熊と闘わせる形式の競技でそれぞれの犬が熊にどう立ち向かうかを見るものです。」

「えっ、実際に闘わせるのですか？」

「いえいえ、違います。」

平蔵おじさんは笑って言った。

「熊は鉄のワイヤで係留するか、檻の中に入れたものを使います。犬が熊にどういう対応をするかで優劣を判定する競技です。熊と直接、闘わせるようなことはしません。実際の猟でもそうですよ。直接、食いつかせるようなことはしません。体の小さいものには小さいものなりの闘い方がありますからね。」

「そうでしょうね。びっくりしました。」

「もう一つのコンテストは展覧会と呼ばれるものです。これはいわゆるドッグショーとは違いますが、ある程度、美人コンテスト的要素があると言ってもいいでしょうね。」

アイヌ犬は鉄砲のない時代に手製の弓と槍でアイヌ人と一緒にヒグマと闘ってきた犬です。それに北海道の険しい山岳地帯で猟に従事出来るように改良されて来ましたから、アイヌ犬の体全体が狩猟に対応できるように発達しています。そうした標準的な体型にどの

くらい近いかを評価するのです。」

「なるほど、そう言われればそうですね。具体的にはどんな面を見るのですか？」

「そうですね。まず、^{まえがち}前勝の体躯（たいく）と言われる胸郭の発達具合ですね。それに耳ですね。」

「耳ですか？」

「そうです。耳です。耳は小さく耳間が広いこと。これは頭蓋骨が広いことを示します。それと、毛。被毛の状態です。それから筋肉や腱の状態です。全体として、強靱（きょうじん）で敏捷（びんしょう）な性質を発揮できる体型かどうかですね。」

平蔵おじさんはそう言ってから「そうした体型に美しさを感じるという意味では美人コンテストの要素もあると言えば、言えますね。」と付け加えた。

「どの犬種もその種類の標準体型というものがありますから、そうしたものを総合的に審査するのが展覧会です。」

「なるほど、そうなんですか？ それにしても、耳の大きさや頭蓋骨の大きさまでが審査の対象になるなんてさすがですね。」

「そうですね。筋腱が発達しているかとか、体高とか、体高と体長の比とか・・・そんな所もチェックされますね。」「いやー、いろいろ、すごいですね。ずいぶん細かいところまで審査するのですね。それにしても、トラクマは大丈夫でしょうかね？」

おじさんは、笑った。

「そうですね・・・トラクマは母親の遺伝から耳は大きすぎるし、目も丸いのでこの分野では期待できないでしょうね。ただ、歩様、つまり歩き方ですね、これが非常に重要な要素なのですが、その点は実に良いですね。非常に軽快ですし、敏捷性に富んでいます。急な斜面の登坂、跳躍、方向転換、急速な走行、これらはいずれもすばらしく良いです。ですから、かなり狩猟性の高い資質を持ったアイヌ犬としての評価を受けるのではないかと思います。」

私の経験ですがトラクマがこちらに来て2か月ほど経ったのことでまだ稚犬（ちけん）の頃ですが、リナミちゃんとトラクマを山に連れて行ったのですよ。山の崖っぶちから谷底に流れている川の淵まで連れて行こうとしたのですが、全く怖がらないでついて来るのですよ。下る時はまだ良いんですよ。問題は帰りの登る時なんです。あの時は本当にしまったと思いましたね。深い所に連れてきてしまったと後悔したんですよ。

ところがトラクマは自分の体よりも深い段差のある急な坂を軽々とびよんびよんと上に登って行くんですよ。こんな身軽で敏捷性のあるアイヌ犬は初めてなので、びっくりしましたよ。」

「そうなんですか、トラクマって。うれしいですね。実は、私もトラクマって、剛胆な犬だなんて、思っていたのですよ。散歩させているときのことなんですが、途中で出会う大きな犬などから吠えられても、無視して悠然と歩いているんですよ。獣猟大会では、そんなところも見られますか？どんな所を見るのですか？」

平蔵おじさんはお父さんに答える形で言った。

「アイヌ犬は獣猟犬なので十分な勇敢さと共に警戒心と敏捷性が要求されます。それらが備わっていないと熊から平手打ちを食って殴り殺されたりします。また、捕まって食い殺されたりします。ですから、優れた猟犬としては熊に果敢に向かって行きながら吠え止

め出来ることが求められるんです。」

「吠え止めですか？」

「そうです。一定の場所に熊を止めておく技能のことです。そうすることで、人間が危害を避けたり、逃げたり、あるいは、銃で撃ち殺すことが出来るからです。この技能は猟犬のあらゆる分野の能力が優れていることによって発揮されるのです。警戒心、慎重さ、敏捷性、闘争心などなどですね。」

「ところで、もしトラクマが獣猟競技会に出場するとしたら、成犬のグループになるのですか？」

「ええ、そうですね。成犬のグループは3歳以上ですから。確かトラクマは3歳6か月ですよ。」

「そうです。」

「では、トラクマは成犬のグループになりますね。生後24か月から36か月未満は未成年で12か月から24か月未満は若犬のグループとか、年齢によってグループ分けされるのですよ。」

そう言うてから

「どうでしょうか。せっかくの機会ですからトラクマを出してみても・・・。」

平蔵おじさんは獣猟競技会への参加を勧めた。

「どっちに出したほうが良いでしょうね。展示会と獣猟競技会と」

「両方出すことになりますね。両方出るとトラクマの特徴もよくわかると思いますしね。」

トラクマの展示会と獣猟大会の出場がお父さんと平蔵おじさんとの話し合いでいとも簡単に決まってしまった。

この時、平蔵おじさんは、北海道犬が山で実際にクマと闘った時の写真を6枚見せてくれた。

「よく撮ったなー」

お父さんは思わず声をあげた。僕もその勇敢な姿に感動してしまった。

1枚目は北海道犬が1匹だけ写っていて雪の上で悠然とクマと対峙している写真。2m位の距離にいて今にも熊に向かって行こうとしている。

ヒグマと対等に向かい合っているのだ。

2枚目は犬が2匹。

熊を挟みうちにして闘いを挑んでいる。1匹の犬は完全に攻撃体勢だ。熊は今にも飛びかかろうとしている。

3枚目はヒグマが犬に飛びかかっている写真。犬は体をひねり体をかわしている。逃げているのではない。攻撃しながら体をかわしているのがわかる。

4枚目は犬が熊の後ろに回り尻にでも食いついているのだろうか。猛然と攻撃に入っている。

5枚目は2匹の犬が連携をとって攻撃しているのがわかる。ヒグマは犬の猛追に明らかにたじろいでいる。

6枚目。人がヒグマに向かって銃を放ちそれが命中した写真。

お父さんも僕もその写真を見て北海道犬のすごさを実感していた。

9章 いよいよ開催当日

展覧会・獣猟競技会の日がやって来た。

9月の第1日曜日。晴天に恵まれ絶好の競技会日和となった。

大会には僕とリナミとお父さんが行くことになった。平蔵おじさんは大会役員だったので僕たちとは別行動することになった。

展覧会のハンドラーをリナミがすることになったが、恥ずかしいとか何とか言ってお父さんをずいぶん手こずらせた。何と言ってもリナミは血統書の名義の上でも実質的にも、一番の御主人様だから。そんな説得もあってリナミはハンドラーを引き受けた。

獣猟大会でのハンドラーはお父さんがすることになった。

「お父さんで大丈夫かな？」って本人はずいぶん弱気だったけれど、獣猟競技会は子どもの僕では危険すぎるし、他にする人もいないので渋々ハンドラーになった。

僕は単なる付添人で見物客となった。僕たちは会場に到着した後、まず受付をした。受付では出陳目録とゼッケンを受け取った。

目録ではトラクマは成犬のクラスになっていた。その後、開会式に参加した。

開会式では優勝旗やトロフィーの返還や来賓の挨拶があって、それから審査員一人一人の紹介があり、最後に審査委員長が、いろいろ審査の内容や諸注意をした。

最初に日程についての説明があった。

午前中は獣猟競技会と展覧会の部の個体審査を衛生検査を含めて実施することになっていた。午後は展覧会の部の比較審査を行うとのことだった。

展覧会の評価は優、特良、良、可として順番をつけることなどを話した。

次に獣猟競技に關しての説明に入った。

その時、何となく緊張した雰囲気になった。

「審査基準ですが、まず、旺盛な警戒心、充実した気迫、瞬時に対応出来る敏捷性、それに鋭い攻撃動作などを評価の観点として採点されます。」

少し甲高い声が会場一杯に響いた。

続いて競技会の方法と留意事項を説明をした。

「引き綱の長さは2.5mから3mのものを用意し必ず規定のものを使用すること。犬の動きが激しいため、首輪の抜けることのないように配慮すること。

熊を中心に半径2.5mの白線を引いてあるのでハンドラーはその円内に絶対に入らないこと。また、ゼッケンを必ずつけること。出陳者の服装は軽装としサンダル類やかかとの高い動きにくいものは身につけないこと。観客は熊より少なくとも30m以上は離れて観戦するように」

初心者は僕たちくらいのものなのか、ほとんどの参加者は再確認するふうに聞いていた。

お父さんとリナミは、かなり緊張気味に話を聞いていたので、僕も急に緊張と不安が高まってきた。

いよいよ、個体審査が始まった。

トラクマの順番が来た時、リナミはトラクマを連れて白線の引いた円の中央に進んだ。

ときどき綱をピンと張ったり自分の側にトラクマを引き寄せたりした。

「綱を右手から左手に変えて下さい。」

審査員が言った。

審査員は犬の周囲を回ったりしながら前後左右からトラクマを観察した。

その後、審査員はトラクマに近づいて口を開けさせて歯のかみ合わせを見たり歯の数を調べたりした。

衛生検査をしているのだ。個体検査が終わった後、トラクマは獣猟競技会に出ることになった。

黄色いゼッケンをつけたお父さんはトラクマを連れて順番待ちの列の中にいた。

お父さんは盛んに他の犬とトラクマの距離を気にしていた。

こんな所で喧嘩になったら困ると思っているのだろう。

獣猟競技会の会場では、ワイヤーが2本の鉄柱の間に約2 mの高さに張られ、その中央から別のワイヤーがシャックルとより戻しを介して熊とつながれていた。

熊は円の中心に位置し、熊の移動出来る範囲を示す内円とハンドラーが犬を操る外円が白線で書かれていた。

飼い主は繋がれた犬を中心円のクマに接近させ、けしかけ、闘いをいどませている。

人馬一体ならぬ人犬一体の戦いを行っているのだ。

紺の帽子の審査員は腕章と白い手袋をし採点用紙を片手にその戦いぶりを審査する。

時間や戦い状況によっては「それまで！」と言って戦いを中止させる手はずになっていた。

10章 ええー そんな・・・ちょっと がっかり

いよいよ、獣猟競技会が始まった。

大会に出場する北海道犬の闘争心や熊との闘い方に期待をしながら見た。

しかし、北海道犬のそれぞれの闘いぶりは意外なものだった。

僕は少し思い込みが強すぎたかも知れない。

獣猟競技会は次のように行われた。

北海道犬①。

飼い主が「行けー！」と声をかける。

犬は吠えながら熊のいる中心円に近づいた。熊は振り返り犬に近づくと犬はすかさず逃げた。左手に採点用紙を持ち腕章をした審判員がさっと右手を挙げた。

「それまで！」

時間にして30秒もかからなかった。

北海道犬②

飼い主と一緒に駆け込んできた犬は何度か吠えたあと熊をちらりと見たが、熊とは目を合わせず、なかなか中心円の近くに向かって行かない。飼い主は「行け！行け！」とけしかけるが、犬は右に寄り左に寄り闘う意志を全く見せない。

熊は犬に尻を向けたまま中心円の中をぶらーりぶらーりと動き廻り全く相手にしていない。

犬は内円と外円の間において飼い主から頭を熊の方に向けられる度に尻込みし、また、飼い主の足下に戻り周囲の臭いをかいだりしている。時間だけが経過してした。審判員が近づいて来た。

飼い主は急きょ、犬を熊に向かわせることを止め、犬を引いて審判員の方に歩き出し「あきらめました。」とばかりにサインを送った。

競技放棄のようなものだった。

北海道犬③

後ろ向きの熊に向かってけしかけられた犬は一度は吠えて近づくのだが、すぐに外側の円の所に戻り吠えることもなく直ぐさま飼い主の所に戻ってしまう。

「ありゃ、ありゃ・・・」「何をびくついているんだ」「おめー、逃げたらダメなんだ」「ダメだ、どーも何ねーな」

笑い声が起こった。

僕はこの時少々、動揺していた。

それまで僕は北海道犬は熊と闘う犬でどんな北海道犬も熊に対して勇敢であると思っていたからだ。実際はいろいろな北海道犬がいるらしかった。しかし、果敢に闘った北海道犬もいた。

北海道犬④

飼い主に「行けー」と言われ中心円に少し入り「ワン、ワン」と激しく吠えた。

何度か飼い主の方を振り返ったのは飼い主の指示を待っているのだろうか。

「よし！」「よし！」と飼い主が叫び、熊に戦いに挑むようけしかけている。

その度、犬は再び熊の方に向かおうとした。

飼い主は興奮して「よし！」「よし！」を連発し長く伸びたひもを引いた。

審判員が右手を挙げた。審査が終わったのだ。

北海道犬⑤

飼い主に連れてこられるなり一気に熊に向かって走り出し闘争体型をとりながら激しく吠えた。

完全な攻撃姿勢である。前足の第2関節までぴったりと地面にくっつけ後ろ足は左右に広げている。腹は地面に接近させ、しっぽは縦に巻き上げかなりの迫力で吠え熊を威嚇している。犬はさらに吠えながら盛んに熊の背後に回ろうとし、熊に近づいたり後戻りを俊敏にした。なかなか意気盛んである。飼い主は特に指示することもなく犬と一緒に円の周りを素早く回った。ついに一回りして2周目に入ったとき判定員が、右手を挙げ「どうも」と言った。

飼い主も「どうも」と言って頭を下げた。

「あの犬は得点が高いよきっと。」

いつの間にか、側に来ていた平蔵おじさんが言った。

北海道犬⑥

白い犬が真っ直ぐ熊に向かって進んでいった。熊は動かない。そして一步一步後ずさりした。

犬は激しく吠えている。熊は途中で止まって口を開け威嚇している。熊がいきなり食いついた。

犬はさっと身を引いたが、危機一髪という感じだった。

その後も同じ位置から大変な勢いで熊に飛びかかって行く。

飼い主は必死でひもを引き熊との接触を避けようとしている。

「やめ！」

審査員の声がした。

「このままだと危険だからね。あまり直進的過ぎる。熊の一撃に遭いかねない。」
平蔵おじさんが言った。

11章 トラクマは闘った

いよいよトラクマの戦う番が来た。

お父さんは150と書いた黄色いゼッケンを胸につけている。

どことなくぎこちない足取りでトラクマを連れて移動した。

トラクマは熊の姿を認めると「うー！」と唸りしっぽを巻き上げ、お父さんを見た。

お父さんは外円に立ち、ピーンと張ったトラクマのひもを少しずつゆるめてトラクマが内円さしかかったとき、「行け！」と言った。

トラクマは敢然として熊の方に向かって行った。

しっぽを立て背中をやや平らにして「ワン！ ワン！」と激しく吠えた。

今にも飛びかかって行きそうな勢いである。ところが近づいたと思ったらぴょんと飛び跳ね後ろに退いた。

また激しく吠えながらも熊と一定の距離を保ちながら熊のいる小円の縁に沿ってぴょんぴょんと体を左右に飛びながら吠えた。

完全に攻撃姿勢になっている。

前足をびたりと地面に付け首を左右に振り顔を完全に熊に向け激しく吠えた。

熊は円中心にいてじっと動かずトラクマの動きを見ている。

トラクマも熊を注視し目を離さない。

熊が一步前に進んだ。

トラクマはぴょんと後ろに飛び下がり、さらに斜め右前方に飛んだ。威嚇的に吠えている。

よく見るとトラクマの背中の剛毛が逆立っている。気迫は十二分である。再び熊がトラクマの方に向きを変えた。

トラクマはさらに一步前に進んで熊を威嚇した。

切れ目なく鋭い攻撃動作を続けている。

前後左右の動きは軽快である。

その時、突然、熊が、ウオーと声を出し前足を上に挙げ後ろ足で立ち上がった。

熊とシャックルを結ぶワイヤーが、斜めにピーンと張った。

「おおー！」と見物人から声が上がった。

トラクマは、ぴょんと素早く後ろに下がり、再び左斜め前に飛んだ。

明らかに左右に飛びながら熊の背後に回ろうとする姿勢を見せた。

そしてまた、近づき、離れ、熊の動きを攪乱させ、己に集中させ一つの方向に誘導しようとする攻撃姿勢が明らかだった。

熊は口を大きく開け、さっとトラクマに平手打ちを食わせようとした。

平手打ちははずれた。

トラクマは再び激しく吠えた。

あのトラクマが、普段、見せたことのない激しさを犬が変わってしまったのかと不安に思うほどだった。

トラクマは熊に食いつかんばかりに威嚇し激しく吠えた。

その時、熊が再び両足で立ち上がった。直立に近い姿勢でそのままどさっとトラクマに襲いかかろうと立ち上がった。

見物客からは先ほどよりも大きな「オー」という歓声が上がった。一度、ゆるんだ高さ2mのワイヤーは熊の前足がどーんと地面につくなり上下に揺れた。トラクマはさっと体をかわした。

熊はこの日の獣猟競技で初めて本気になって北海道犬と戦おうとした。

「はい、それまで！」

審判員が右手を上を挙げた。

お父さんはホッとした顔をして戻ってきて「トラクマ、良くやったぞ。」と言った。

そして「トラクマが闘いやすいように途中から綱をゆるめてやった。」と言った。

お父さんとリナミと僕の3人はトラクマを連れて人が余り来ない芝生に移動してくつろいだ。

その時、平蔵おじさんがやって来た。

「トラクマ、優勝するかも知れないよ。獣猟競技はほぼ満点に近いと思うよ。」

「えー、そうなんですか？」

お父さんは少し頬をゆるめて返事をした。

「ただ綱をゆるめすぎていましたね。もし、トラクマが直進型の犬だったら熊にやられています。」

「直進型ですか？」

「北海道犬に必要なのは、直接、熊と闘う犬ではありません。犬は熊には絶対に勝てません。ですから、いきなり熊に飛びかかっていく直進型の犬は危険なのです。もちろん、飼い主を助けるために死を覚悟で飛びかかっていく場合も実際にあるのですが。大事なのは、熊の注意を自分の方に向けさせ吠え止めをさせることが出来るかどうかです。それが肝心なのです。」

平蔵おじさんはお父さんに言い聞かせるように言った。

「その為には、熊を恐れず果敢に向かって行きながら決して熊に飛びかからない犬です。」

熊に近づいては離れ、近づいては離れして人間よりも犬の方に注意を向けさせる事の出来る犬が優れた犬なのです。そして、その吠え止めの時間が長ければ長いほどよいのです。犬が吠え止めをしている間に人間は逃げたり銃を撃つ体勢を整えたり出来るわけですから。その意味でも今回のトラクマの闘いぶりはすばらしいものでしたね。」

「熊が平手打ちをしましたね。びっくりしました。」

「そうですね。」

「トラクマは直接、頭をなでてやろうとすると頭をさっとよけるんですよ。頭を直接なでられるのを特にいやがるんですよ。それで頭をなでる時はいつも首をなでながら手を頭に移動するようにしているのです。今日、そのことが特別の意味を持っていることがわかりましたよ。」

「それは虎の一芸というヤツですね。野生の動物は生まれながらにして狩の仕方や身の守り方を知っているという意味だったと思いますが、もしかしたらその一つかも知れませんかね。」

「そんな言葉があるのですか。北海道犬は生まれながらにして熊の平手うちを避けるように遺伝子が組み込まれているのでしょうかね。」

「うーん。それはわかりませんね。アイヌ犬にもいろいろいますからね。でも、訓練や体験の中でそうした敏捷性を身につけているアイヌ犬は多くいると思いますね。」

「展覧会と獣猟競技会が終わって帰りの車の中で僕は考え込んでしまった。」

「僕は今までどんな北海道犬も皆同じように熊と勇敢に戦うのだと思っていた。しかし、実際はどうも違うようだ。」

「今日の獣猟競技会で闘った北海道犬を見ると熊と果敢に闘う犬はかなり少ないように思った。」

「大昔、鉄砲のない時代に弓と槍だけのアイヌ人と一緒に本当に闘ったのかと思った。正直なところかなりがっかりした。」

「でも、少なかつたけれど熊を恐れない北海道犬もいたことは確かだったし、トラクマが1位になったのだから「まーいいか！」って思った。」

12章 祝勝会での犬談義

「トラクマの優勝、おめでとうございます。」

そう言って樽前先生が尋ねてきた。

樽前先生は、まずお父さんやお母さんに挨拶をしてから、すでに集まっていた平蔵おじさんや美笛さんに「おめでとうございます。」と言った。

「今晚はトラクマの祝勝会ということでそれぞれ集まって来たのだ。」

「じゃ、全員そろったところで始めましょうか。」

お父さんが言った。

テーブルの真ん中にジンギスカンがおかれ、その周りには酒やビールや焼酎とそれにジュースが置かれていた。

「トラクマは良くやったなあ。」

みんなは口々に言い合いうれしそうだった。

大会の様子をお父さんが得意げに説明していた。

平蔵おじさんも時々、展覧会や獣猟大会の意義について話しながらトラクマを褒めちぎっていた。

そんな中でお父さんは僕が思っていたのと同じ疑問を平蔵おじさんに尋ねた。

「北海道犬って、どれも勇敢で熊に立ち向かうのかと思ったのですが、意外でした。結構、逃げ腰の犬もいて正直なところ少しがっかりしましたね。」

その時、平蔵おじさんが、少し、考えながら言った。

「そりゃ、そうですよ。アイヌ犬だって色々ですよ。しかし、私は止む得ない事情によるものだと思っているのですよ。そもそも、アイヌ犬は「厚真^{あつま}の虎毛」に限らずもともと狩猟犬なのでから狩猟犬としての資質は生来備わっていると思うのです。

しかし、その資質や能力を十分発揮させるためにはやはり訓練が欠かせません。なんといっても命がけで熊と闘うのですからね。ところが最近のアイヌ犬にはその狩猟犬としての日常的な訓練がなされないケースが多くなっていることです。どちらかということ展覧会でよい成績を取るための見た目の良さというか、体型を重視するような改良になって来たというか、そんな傾向も出てきているのではないかという気がしますね。」

「なるほど、そうなりますと、日常的に狩猟性をどう高めるかという意見なども出そうですね。」美笛さんが言った。

「そうなんですよ。実際は難しい問題ではありますがね。只、この件に関しても、北海道犬を保護、保存しようとする団体が幾つかに別れておりましてね、あくまでも、狩猟性を大事にする観点から獣猟競技会を必ず実施する団体があります。もちろん、展覧会も一緒ですが。しかし、一方では、犬が都会に住んで何十年にもなり、すでに狩猟自体が存在していませんので、狩猟の能力を直接問うことは時代錯誤だという考え方もあります。そういう考えの団体は獣猟競技会を実施せずに展覧会だけを実施しています。アイヌ犬が、狩猟を通して獲得した様々な体型を保持することを重要な視点にして展覧会を開催する考え方ですね。私が所属しているのは、獣猟競技会と展覧会の両方を実施する団体ですが、トラクマの血統書は私の所属する団体からもらいました。」

「なるほど。私にはどちらの考えも一理あるように思いますね。なるほど・・・。」

お父さんはそう言ってから「ところで、北海道犬の狩猟の訓練って、いつ頃から始めるのですか？」と聞いた。

「そうですね、大体、生後5か月頃から始めますね。最初は獲物を探すことよりも山を歩く訓練が大事になります。色々な所を歩かせるのです。谷や坂の急斜面を歩かせたり、川越を、つまり川を渡らせたり訓練です。こうした訓練を子犬の頃にしておかないと、成犬になってから水や川越を恐れるようようになって獲物を逃がしてしまうことになってしまいます。雪の上の訓練は3月中旬の堅雪（かたゆき）になった頃に行いますね。そこでも急斜面や深雪の所をどんどん歩かせたりします。それから色々な動物の臭いを教えてやるのです。」

「どんな風にですか？」

「そうですね。熊やタヌキは大きな木の根のような所にいることが多いのです。そこで子犬をそんな所に連れて行って臭いを嗅がせたりしますね。初めは大きな動物ではなくり

ス、イタチ、タヌキなど小動物に向かわせていくことが良いとされています。それからもう一つ大事なことは、猟をする前には目的の獲物の骨を犬小屋に置いておくとか、血を胸の周りに塗っておいてその獲物の味を覚えさせるのが早道だそうです。この話は熊を40頭以上、鹿を700頭も捕獲したという昔の有名なハンターの話ですけどね。まあ、そんな訓練の末、犬だけで鹿を捕ったり熊にも向かって行くアイヌ犬が作られるのですよ。」

「なるほど・・・それもまた、すごい話ですね。血を胸に塗りつけるのですか。と言うことはそんな風に狩猟の訓練された北海道犬は最近ではないということですか？」

「そうですね。かなり少ないと思いますね。そのために、先ほど言われたような熊から逃げるアイヌ犬が出てきているのだと思いますね。」

「なるほどねえ。それで今日の獣猟大会のようなことが起こったというのですね。」

「そう思いますね、私は。しかし、今日の大会でも、とにかく熊に向かっていく姿勢の犬が結構いたと思いますけどね。やはりアイヌ犬なんですよ。他の犬種の犬はああはなりませんね。例えばですね、こんなことがあったのですよ。ある家の秋田犬が、豪雨の日、綱を放れて町内を闊歩したということがありましてね。ところがその秋田犬は近くの飼い犬を2匹もかみ殺したんですよ。この事件のことは、当然、街の評判になりましてね。しかし、その後、そのどう猛な秋田犬に熊の肉をエサに与えたところ、その秋田犬は体を縮めて熊の肉を食べずに自分の小屋に入ってしまったという話が残っているんですよ。秋田犬のような闘争心の強い犬でも熊に対する恐怖心は相当なもののようなんですよ。」

「そうでしょうね。普通は犬にとって熊は怖いものなんでしょうね。まあ当然ですよ。」

「猟の経験のないアイヌ犬を今回のように係留した熊の所に連れて行った時の反応には大体4つのタイプに分けられますね。今回もそれが現れました。」

平蔵おじさんは、獣猟競技会を思い出しながら言った。

「一つは、初めから熊を恐れ尾を腹に巻き込んで後ずさりするもの。二つ目は無鉄砲に正面から熊に飛びかかるもの。三つ目は全く無頓着で熊が近づいても特別な反応を示さないもの。そして4つ目ですが、警戒しつつ熊の周囲を回り、吠えたてながら攻撃しようとするもの・・・ですね。トラクマは紛れもなく4つ目のタイプのアイヌ犬でした。やっぱり持って生まれた資質というものが大きいのです。しかし、普通の多くのアイヌ犬も訓練次第で熊と十分闘える犬になるのです。」

そんな話があって、それぞれ思い思いに話が弾んだけど結局「トラクマは大したものだ。」という話にもどった。

「ところで、また、別の質問になりますが。」と樽前先生が言った。

「犬と一緒に山に入った時、犬の反応で熊が近くにいるのか遠くにいるのかなどがわかるのですか？ そうしないと、危険が伴う場合があると思うのですが。」

「その通りですね。それは、犬の反応、動きを見て近くに何がいるか。あるいは犬が何を探しているか。それがおおよそわかるのですよ。」

「やはりそういうものですか。そうでないと困りますよね。」

「例えば、一般的にですが、鼻を高く上げて、これを高鼻と呼んでますが、こんな時は木や枝を気にしている証拠なんです。その時は犬が樹上のリスなどの臭いを追っている時か、風下で熊などの搜索をしている時なんです。」

「はあー、なるほど。そうなんですか？」

「鼻を地面につけるように低くしているのを地鼻と言いますが、こんな時はタヌキやイタチ、あるいは鹿や熊の足跡を探している時なんですね。」

「そうなんですか。初めて知りました。それはまた、すごいですね。」

お父さんや樽前さんは口々にそう言った。

「ただ、これも犬のクセもありますので、犬を使いながらそれぞれの犬の特徴を覚えておくことが大事になりますね。いずれにせよ、飼い主は犬の動作や緊張の様子から獲物の方向や遠近を判断することが大事になります。」